

中世の「国家理性」? ——status の概念史に寄せて：その 1——

小川 浩三

目 次

1. はじめに
2. 最初の用例
3. ローマにおける status—特にキケロの場合—
4. 『グラチアヌス教令集』 前の status ecclesiae
5. 『グラチアヌス教令集』 の status ecclesiae generalis
6. 結びにかえて

1. はじめに

1989年10月図書館を案内していた筆者にドイツ公法史の泰斗ミヒャエル・シュトルアイスは書架にあった一冊の書物を懐かしそうに取り出して示した。ゲインズ・ポウストの『中世法思想の研究：公法と国家、1100–1322年⁽¹⁾』だった。フリードリヒ・マイネッケの『近代史における国家理性の理念』とその後の研究を振り返った論文の中で、マイネッケがマキャヴェリつまり近代から始めたことに対する批判としてシュトルアイスがまず取り上げたのがゲインズ・ポウストであった⁽²⁾。ポウストの論文の表題は、「Ratio publicae utilitatis, ratio status および『国家理性 (reason of State)⁽³⁾』、1100–1300」であり、中世中期における「国家理性 (reason of State)⁽⁴⁾」を問題にする点で、文字通りマイネッケに対する挑戦であった。本稿は、このポウストの論文をも手がかりとして中

(1) Gaines Post, *Studies in Medieval Legal Thought: Public Law and the State, 1100–1322*, Princeton University Press 1964 (Reprint, The Lawbook Exchange 2006).

(2) Michael Stolleis, Friedrich Meineckes „Idee der Staatsräson“ und die neuere Forschung, in: idem, *Staat und Staatsräson in der frühen Neuzeit*, Frankfurt am Main 1990, 145 (初出1981年).

(3) Ratio Publicae Utilitatis, Ratio Status, and “Reason of State,” 1100–1300. この論文は最初ドイツ語に翻訳されて *Die Welt als Geschichte*, XXI (1961) 誌上に公表された。英語版は、その後若干の改定を加えられて前注書で公表された。本稿では英語版を用いる。

(4) ポウストは、中世の史料に現れる imperium, regnum, respublica および civitas について一括して「国家 (State)」と呼んでいる。たとえば、regnum は「抽象的の一体をなすもの (abstract entity or body)、団体 (corporate body) にさえなっており、王や政府およびすべての構成員の上位にあって、多くの観点で公法 (public law) の最高の主体 (supreme subject)」であって、今日的な意味で「国家」と呼んでも歪曲ではないという (Post, op. cit. (n.1), viii)。ただし、ドイツ語では「国家」が Staat と表記され、他の身分や状態を示す Stand と区別されるのに対して英語ではこれらはすべて state と表記されるので、「国家」を意味する場合だけ State と大文字で表記している。

世における「国家理性」に関する議論、とりわけ status の概念史を追求するものである。

なぜいささか古くなった書物に依拠して本稿を書くのか、若干説明しておかなければならない。第一は、中世政治思想に対する関心が近年増加してきた⁽⁵⁾が、その流れを一層促進する一助になればということを意図している。第二に、11世紀末から13世紀にかけて、統治に関わる問題は、以下に見るようにローマ法や教会法の言葉を通じて行われた。しかし、法学的な議論はやはり伝統的な政治思想史の議論では扱いにくく、十分には紹介されてこなかった⁽⁶⁾。ポ

(5) 近年の学界動向については、将基面貴巳『ヨーロッパ政治思想の誕生』（名古屋大学出版会・2013年）2 - 16頁が概観を与えてくれる。

(6) この点でも将基面前注書は、法学の重要性を指摘し自ら実践している（第2章）。ただし法学者からすれば、若干物足りない。たとえば、70頁は教会と世俗との間の権力関係をめぐる論争に関連して叙任権闘争に言及している。たしかに結果的には叙任権をめぐる教会と世俗君主の対決ということになったとはいえ、グレゴリウス改革の当初の課題は聖職者の綱紀肅正であり、それはとりわけ妻帯の禁止および聖職売買（symonia）の禁止を目指し、この関連で皇帝あるいは国王による司教叙任が聖職売買（symonia）になるのではという形で問題は生じた。すなわち、聖職売買は対価を給付して聖職を獲得する場合だけでなく、将来の対価の給付を約束して聖職を獲得する場合も含み、この場合の方がある意味では悪質であった。聖職売買によって司祭なり司教なりに就任した教会の財産によって給付がなされることになるからである（買収した企業の資産を買収資金の返済に充てる現代のM&Aの世界！）。皇帝による叙任にあたって臣従礼を行い将来の奉仕（給付）を誓約し、これに対して叙任が行われるということは、まさに聖職売買の要件に該当する。この解決はしたがって、皇帝の叙任という行為を、教会監督者としての司教の叙任と皇帝（国王）の臣下への授封という2つの行為に分ける、より一般的に言えば霊的事項（spiritualia）と俗的事項（temporalia）を分類（divisio）し、実際に行われる行為、たとえば司教杖と指輪の授与や臣従礼といった行為をそれぞれの事項（前者は霊的、後者は俗的）に分別（distinctio）することによってはかられた。これはまさにこの当時（11世紀末）に始まるスコラ的方法の適用そのものである。さらにこの議論は、司教が教会監督者と皇帝の臣下としての領主という2つの職務に応じて2つの人格（当事者性 persona）—司教個人の人格を加えれば3つの人格—をもつこと、ここからさらに職務に体现される人格と職務を

ウスト自身もこの点を十分に意識して研究を行ってきた。本稿も、法学的な言葉を使った統治の議論を紹介し、政治思想の議論を拡大しようとするものである。第三に、ローマ法あるいはローマ法の影響史の研究は従来圧倒的に今日で言えば私法にあたる領域に関連して行われてきた。しかし、中世法学の研究は私法にとどまらないローマ法の豊饒な世界を示してくれる。そのことは、ローマ法研究に対してもインパクトを与えることができるのではないか。

以下ではポウストの研究と本格的に取り組むための前提として、1140年ころに編纂された『グラチアヌス教令集』に至るまでの status ecclesiae の概念をたどる。その際、status の概念にできるだけ関連させながら叙述したいと思う。その理由は、ポウストが utilitas publica あるいは ratio utilitatis publicae 等の用語によって議論されていることも「国家理性 (reason of State)」に関

担当する個人（人格）とを区別する制度的思考へと発展した。これらを抜きにすれば、前注書で盛んに問題にされる「代理人」や「法人」といった観念は出てこないのである。

(7) 中世の法学と近代以降の法学の違いの具体例として、その叙述の体系を上げることができる。中世法学の体系の基本は、ユスティニアヌス帝の『勅法集 (Codex)』に依拠して作られた諸教皇令集の体系である。それは一般的な法源論に続いて「裁判官 (iudex)」＝公職者、「裁判手続 (iudicium)」、「聖職者 (clerus)」＝主体としての人、「婚姻 (conubium)」＝主体の作る関係、「刑事犯罪 (crimen)」という5編構成で、裁判官と刑事裁判はローマ法から見ても中世の法学においても公法の領域である。これに対して近代以降の体系の典型は『法学入門 (Institutiones)』である。それも、法源論に続く「人 (persona)」、「物 (res)」、「訴権 (actio)」という3編構成ではなく、より実体 (material) 法的に純化した「人」「物」「行為 (actio)」あるいは「行為によって形成される関係 (factum)」となり、私法・実体法・一般法としての「民法 (lois civiles)」の体系である。もちろん、「民法」の外に「公法」が叙述され、そこにおいてローマ法の影響は顕著であった。19世紀のドイツ法学のロマニステンはこの意味での「民法」に集中し、その結果としてローマ法＝私法というイメージを定着させることになった。

(8) status ecclesiae の概念については、すでに旧稿「対論を求めて—中世法学と教皇立法権」小川編『複数の近代』(北大図書刊行会・2000年)44頁以下で、若干触れた。本稿および続く別稿は、この補訂を目指すものである。

連するものとして一括して議論しており広すぎると思われたからである。後で見ると、status 自体が異なったコンテキストの中で議論されており、それを歴史的にたどるだけでも、相応のことが指摘できるように思われる。さらに、status の概念に即して議論した方が、その後の概念史的展開—*stato* や *état* や *Staat* への概念の展開—にとって意味があると思われるからである。

2. 最初の用例

短期間の在位期間（417年3月18日—418年12月26日）にもかかわらず複数の過誤を犯して混乱を巻き起こした教皇ゾシムス（Zosimus）の死後、その葬儀が行われたまさにその日にエウラリウス（Eulalius）の支持者たちがラテラノ教会を占拠し、彼を教皇に選出した。少し遅れて多数派の聖職者・俗人たちはボニファチウス1世（Bonifacius I：在位418年—422年）を教皇に選出した。西ローマ皇帝ホノリウス（Honorius：在位393年—423年）は先に適法に選出されたとしてエウラリウスを教皇として認めたが、その後にボニファチウス側の求めに応じて教皇の選出を停止し、公会議で改めて選挙することに決め、両者にローマからの退去と立ち入りの禁止を命じた。公会議が開かれる前の復活祭において禁止に反してエウラリウスがローマに立ち入ったため皇帝は彼の選挙を無効とし、ボニファチウスの選挙を有効とした。この過程でボニファチウスがホノリウスにあてた書簡が1140年ころに編纂された『グラチアヌス教令集（*Decretum Gratiani*）』（以下『教令集』と略す）に採録されている⁽⁹⁾。

(9) ちなみに、本書簡を教令集に採用した意図についてグラチアヌスは付言（*dictum ante* D. 97 c. 1）の中で次のように説明している。

「この法文によって、皇帝にもいかなる俗人にも司教の選挙や教会の事項について決定することは許されないということが、明確に示される。ところで、これらの者たちによって定められたことは何であれ、為されなかったものと看做すべきである。ただし、ローマ司

教の署名によって補強された場合は別である。したがって、かの皇帝ホノリウスの決定〔D. 79 c. 8〕は、上に述べたように、無効と解される。なぜなら、最高位の司教の選挙に関する聖なる教会法令の権威に反して決定しようとしたものだからである。しかし、同法文から読み取れるように、教会の求めに応じて皇帝が篡奪者に対して決定をする場合は有効である。たとえば、信仰を擁護するために異端者が教会の名で何かを占有することの無いように定めたことがあったと読まれる場合である。しかし、教会から要請されていない者たちは、教会の事項について何かを決定する権能をもたない。ところで、ホノリウスは自らの権威によってではなく、福者ボニファチウスの嘆願に応じて、教会の平穏を慮り、争う者たちの野望を罰することを配慮したのであった。

したがって、同じ司教ボニファチウスは嘆願の書簡を皇帝ホノリウスに宛てて、以下のよう述べている。

(Hoc capitulo patenter ostenditur, quod nec inperatori, nec cuilibet laico licet decernere uel de electione Pontificis uel de rebus ecclesiasticis. Quecumque autem ab eis constituta fuerint, pro infectis habenda sunt, nisi subscriptione Romani Pontificis fuerint roborata. Unde illud Honorii Augusti, ut supra dictum est, uanum esse uidetur, quod contra auctoritatem sacrorum canonum de electione summi Pontificis decernere temptauerit. Sed sicut ex eodem capitulo habetur, precibus ecclesiae imperator in presumptores ualet decernere, sicut pro defensione fidei quondam decreuisse leguntur, ne heretici aliquid nomine ecclesiae possiderent. Ab ea autem non inuitati de rebus ecclesiasticis aliquid disponendi non habent facultatem. Honorius uero Augustus non sua auctoritate, sed B. Bonifatio supplicante, ecclesiasticae quieti consulere et concertantium ambitionem punire curauit. Unde idem Bonifatius Episcopus supplicationis epistolam Honorio Augusto destinauit, dicens :)」

この付言は、ちなみに、グラチアヌスの方法を典型的に示している。一方には俗人が教会の事項に関与してはならないという教会のカノン (canon : ギリシア語の原義は「規則」。教会では本来教皇の具体的問題に対する決定 (decretum) に対して公会議で定めた規則を意味したが、後に教会法令一般を意味するようになった) があり、他方では皇帝ホノリウスのボニファチウス 1 世の教皇選挙に介入した命令 (二重選挙の凍結と公会議による新たな選挙の実施) も『教令集』に採録されている (D. 79 c. 8)。この矛盾を解消するために、俗人の関与する場合について、「教会の要請による介入」と「教会の要請によらない介入」とを分類 (divisio) し、本法文の事例が「教会の要請による介入」にあたりと分別 (distinctio) した。スコラの方法である。

D. 97 c. 1

「私の教会にわれらが神は人的事項（res humanae）を統御する陛下と並んで私の祭司職を与えられましたが、この私の教会のためにわれらをとりえて離さない心配事は、私が体の不調からこれを行うことができないとしても、この教会で起こっている事柄について、司祭や聖職者たちがこぞって、そして俗人信徒たちの騒擾によってあおられている集会のゆえに、キリスト教徒の最高君主の耳に届いていないのではないかということです。すなわち、あるべきこととは異なることが起こるとき、すべての事柄を衡平な指導によって差配される陛下がなさねば、われらは国家の静穏と教会の平和を覆す恐れのあることが行われるのをただ黙ってみているだけでしょう。すなわち、陛下は神の信仰の育成者として主の恩寵を受けて人的事項を配慮されているのですから、神的事項を常により重き心をもってご配慮下さったことが確かな陛下の栄光のもとで、われらの信仰の配慮の義務を負っていなかった皇帝のもとにおいてさえ長年に渡ってずっと守られてきたことが堅固なそして安定的な法によって大切にされなかったとしたら、それはわれらの過ちです。すなわち、許されることが遵守されるべきであり、陛下のご慈悲の支配のもとでも許されないことに対して決して立ちすくむのであってはならないのです。

§. 1 すなわち、この上なきキリスト者である皇帝陛下、教会自身がたしかに私の言葉によってですが、しかし教会そのものの敬意を払うべき愛によって陛下の献身を求めているのです。この教会はわれらが神キリスト、陛下の信仰の導き手、陛下の支配の舵取り人のご自身だけのために花嫁として触れられることのない処女として守られているものなのですから、陛下が教会において誰かが待ち伏せた突然の襲撃によって打ち倒され、穏やかな景色が荒れ狂う暴風によって掻き乱されるのを黙って見逃すことがないようにお願い申し上げます、この上なき栄光に充ち、この上なく平穏で常に尊厳をもたれ

る皇帝陛下。〔以下中略〕

§. 2 〔陛下の命令に〕 忠実に従った避難が陛下の厳かな信仰と結びついた温厚なる心に満たされますのは、この避難に役立つことは何であれ陛下が行われ、私の兄弟でありともに祭司である者たち、最も証された人々、私および教会を構成するすべての者によって送られた使節に下されるときです。これらに引き続いて、聖なる信仰のために、陛下の温厚さに充ちた首都において、以上の要請をお認めくださる同じ心をもって、末永く普遍的教会のよき状態のためにご配慮くださいますようお願い申し上げます。⁽¹⁰⁾」

(10) *Ecclesiae meae, cui Deus noster meum sacerdotium uobis res humanas regentibus deputauit, nos cura constringit, ne causis eius, quamuis adhuc corporis incommoditate detinear, propter conuentus, qui a sacerdotibus et clericis uniuersis et Christianae plebis perturbationibus agitantur, apud aures Christianissimi principis existimemus desse. Si enim secus quam oportet eueniat, non uos id facere, qui cuncta equa moderatione conponitis, sed nos per nostram tacentem desidiam uidebimur quod ciuitatis quietem et ecclesiae pacem peruertere ualeat admisisse. Cum enim humanis rebus diuinae cultor religionis Domino fauente prouideas, nostra culpa erit, si non id sub uestra gloria, quam certum est diuinis semper rebus animo propensiori fauisse, firmo et stabili iure custodiat, quod per tot annorum seriem sub illis etiam principibus obtinuit, quos nulla nostrae religionis cura constrinxit, id est, ut licita seruentur, et sub uestrae inperio clementiae minime que sunt illicita formidentur.*

§. 1. *Ipsa enim ecclesia deuotionem tuam, Christianissime inperator, meo quidem sermone, sed suo uenerabili affectu appellat, quam Christus Deus noster, uestrae fidei rector et uestri inperii gubernator, sibi uni desponsatam et intactam uirginem seruat, ne in ea aliquos patiamini insidiantium procellarum fluctus illidi, et quietam faciem tempestatis insolitae tumore turbari, gloriosissime et tranquillissime inperator semper auguste....*

§. 2. *Habet refugium pium tuae mansuetudinis animum, cum suae religionis ueneratione coniunctum, cum, quicquid huic proficiat, uos agatis, conferatis fratribus et consacerdotibus meis, probatissimis uiris, a me et ab omnibus (qui ecclesiam faciunt legatis; quibus prosequentibus (precamur) causa sacrae religionis, ut in urbe uestrae mansuetudinis hoc animo, quo postulatis annuitis, in perpetuum statui uniuersalis ecclesiae consultatis.*

この法文で本稿に関連するのは、末尾に出てくる「普遍的教会のよき状態」と訳した *status universalis ecclesiae* である。ここでは、*status* を評価から中立的に「状態」ではなく規範的な意味で「よき状態」と訳した。その理由は、以下で見るように、ローマの用語法からしても規範的な意味を込めることができし、またこの書簡を解釈する中世の法学者たちのもとにおいても規範的な意味で取られたからである。

このような規範的な意味で解釈できる *status* の用法は、ボニファチウス 1 世から時代的に近接する大教皇レオ 1 世 (Leo I: 在位440年－461年) にも見て取ることができる⁽¹¹⁾。

「しかし、われらが父祖たちの間で常にそしてよく保たれてきたこの道を、〔アルル司教〕ヒラリウスは、健全に維持されてきた諸教会のよき状態と司祭〔司教を含む〕たちの一致とを新たな傲慢な行為によって混乱させるべく、踏み外しました (Sed hunc tramitem semper inter majores nostros et benetentum, et salubriter custoditum Hilarius Ecclesiarum statum, et concordiam sacerdotum novis praesumptionibus turbaturus excessit)。」(Ep. 10, 2. 445 年ヴィエンヌ州 (provincia) の司教たち宛書簡⁽¹²⁾)

「しかし、教会のよき状態および司祭たちの一致に関わる何か他の事柄が生じたなら、そのときには十分に議論したうえで、決めるべきこと及び決めたことすべてについて欠かすことなくわれらに報告することを主を畏みながら欲します。それによって教会の習いにしたがって正しく合理的に決められたことがわれらの裁定によって強化されることになりますので (Si quae vero

(11) 以下は、Yves Congar, “Status Ecclesiae”, *Studia Gratiana* 12 (1972), 5 et s. に依拠した。

(12) Migne, *Patrologia Latina* (MPL), vol. 54 col. 630 (以下、PL 54, 630と省略)。

aliae emerterint causae quae ad statum ecclesiasticum et ad concordiam pertineant sacerdotum, illic sub timore Domini volumus ventilentur, et de componendis atque compositis omnibus ad nos relation plena mittatur, ut ea quae juxta ecclesiasticum morem juste et rationabiliter fuerint difinita, nostra quoque sententia robrentur.)」(Ep. 12, 13. 446年8月10日 マウリタニア・カエサリエンシス州の司教たち宛書簡⁽¹³⁾)

「しかし陛下は軍隊と国民のご配慮の外にキリスト教信仰のためにこの上なき忠信をもってお気遣い下さいますので、すなわち神の民において教会分裂や異端者や何らかのスクャンダル〔躓きの石〕が増大することのないようにとお気遣い下さいますので。と申しますのも、唯一の神に対する信仰告白において永久不可変の三位が賛美されるときにこそ御国の最善の状態があるのですから (Si quidem praeter imperiales et publicas curas piissimam sollicitudinem Christianae religionis habetis, ne scilicet in populo dei aut schismata aut haereses aut ulla scandal conualescant, quia tunc est optimus regni vestris status, quando sempiternae et incommutabili trinitati in unius divinitatis confessione seruitur.)」(Ep. 24, 1. 449年2月18日東ローマ皇帝テオドシウス2世宛書簡⁽¹⁴⁾)

「異端者たちに抗して教会の揺るぎなきよき状態をお守り下さい、陛下の帝国がキリストの右手によって守られますように (Defendite contra hereticos inconcussum ecclesiae statum, ut vestrum Christi dextera defendatur imperium.)」(Ep. 44, 3. 449年10月13日テオドシウス2世宛書簡⁽¹⁵⁾)

「彼ら〔レオが任命した特使司教ルチェンチウスと司祭バシリウス〕とあなたの愛が結びつくことによって、教会全体のよき状態にかかわる事柄におい

(13) PL 54, 656.

(14) PL 54, 735.

(15) PL 54, 831.

て何事も疑わしく、また、怠惰に行われることがないようにしてください…

(quibus tua dilectio societur, ut nihil in his quae ad universalis Ecclesiae statum pertinent, aut dubie agatur aut segniter…)。」(Ep. 85, 1. 451年6月19日コンスタンチノポリス司教アナトリウス宛書簡)⁽¹⁶⁾

最初の2つの書簡では、status ecclesiarum あるいは status ecclesiasticus と concordia sacerdotum とが並列されていることから、ここでの ecclesia は司教や司祭といった祭司と区別された会衆(人々)一般を指していると解される。ecclesiarum という複数形は universalis ecclesia と対比すれば、地方のそれぞれの教会(会衆の集合体)を指していると解される。さらに、3番目の書簡に見られる status regni(王国の状態、あるいは、よき状態)は、後にキケロにおいてみる status rei publicae や status civitatis との類似性を考慮すれば、人々の集合体としての「国家(civitas, res publica)」の status であり、「教会(ecclesia)」が同じく人々の集合体であることを考慮すれば、status ecclesiae と status rei publicae との平行な関係も想定できる。そのことは、status ecclesiae と近い関係にある utilitas ecclesiae(教会=会衆の利益)と utilitas publica(公共=国民の利益)あるいは utilitas rei publicae との平行な関係からも十分に考えられることである。最後に、最初の書簡にある「健全に維持されてきた(salubriter custoditus)」status を「混乱させる(turbare)」という言い方は、status が様々に変化しうる単に記述的な「状態」というよりも規範的な意味で理解でき、さらに concordia というこれも規範的な意味をもつ語と並列されていることも、この理解に有利に働くであろう。

(16) PL 54, 922.

(17) 教皇レオ1世の時代を含む5世紀における utilitas ecclesiae と utilitas publica との平行な関係については、Michael H. Hoeflich, The Concept of Utilitas Populi in Early Ecclesiastical Law and Government, Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Kan. Abt., Bd. 98 (1981) 59 et s. 参照。

3. ローマにおける status—特にキケロの場合—

5世紀の教皇あるいはその官房が status の語をどのように用いていたかを理解するためには、当時の一般的用語法、とりわけ皇帝官房の用語法を探求しなければならない。実際、前掲のボニファチウス1世の書簡は皇帝ホノリウスにあてたものであり、ホノリウス、少なくともその官房が理解できるものとして描かれたはずである。一般的に言っても教会は多くの国家的制度を自己の組織化のモデルとしたのである。⁽¹⁸⁾しかし、筆者には残念ながら5世紀の皇帝の勅法などに現れる status を調べることは現在不可能である。したがって、きわめて不十分であるが、比較的研究のあるキケロの status を概観し、何がしかの示唆を得たいと思う。

『国家論 (De re publica)』において status の語が出てくるのは、「国家の最善の状態〔または形態〕」という意味で出てくる。すなわち、「われわれはスキピオにお願いして、彼が何を国家の最善の状態〔または形態〕と評価するかを説明してもらいましょう (Scipionem rogemus, ut explicet, quem existimet esse optimum statum civitatis)」⁽²⁰⁾というところから国家論が始まる。この「国家の最善の状態〔または形態〕」という言い方は、単に status optimus とだけ言われて、文脈からそれが civitas あるいは rei publica のそれだと理解できる場合も含めてしばしば出てくる。⁽²¹⁾これらは通常「最善の政体 (the best form of gov-

(18) クヌート・W・ネル (村上淳一訳)『ヨーロッパ法史入門』(東京大学出版会・1999年) 48頁。

(19) キケロの status については、さしあたり、Heinz Mohnhaupt, *Verfassung I*, in: Mohnhaupt & Dieter Grimm, *Verfassung : zur Geschichte des Begriffs von der Antike bis zur Gegenwart*, 2. Aufl., Berlin 2002, 10–14 参照。

(20) Cicero, *De re publica*, 1, 33.

(21) optimum status civitatis という形で出てくるのは、1, 34; 1, 70; 1, 71; 2, 39. optimum

ernment)」あるいは「理想国家 (ideal State)」と訳されるが、もちろんプラトンの『国家』に由来するトピックである。status の意味についていえば、「最善の」という修飾語によって規定されているので、それ自体としては記述的で規範的意味をもたないと解することができる。とはいえ、この用法の status は一般的には良い意味の修飾語と結びつくことが多い。⁽²²⁾

status という形で出てくるのは、1, 51 ; 2, 30 ; 2, 33 ; 2, 41 ; 2, 65 ; 2, 66.

(22) 2, 57「なぜなら、君たちには最初にわたくしが述べたことを心にとめておいてほしいのだ。国家において権利と義務と職務との衡平なバランスがなければ、したがって政務官に十分な権力が、第一人者たちの助言に十分な権威がなく、国民に十分な自由がなければ国家のこの変えてはならない状態は保つことができないのだ (id enim tenetote, quod initio dixi, nisi aequabilis haec in civitate compensatio sit et iuriset officii et muneris, ut et potestatis satis in magistratibus et auctoritatis in principum consilio et libertatis in populo sit, non posse hunc incommutabilem reipublicae statum)。」「しかし彼ら〔潜主を倒したよき人士 (boni) たち〕が無謀であればかの党派支配が生ずる、これも別種の潜主たちであり、これはしばしば最良の人びとのかの輝かしい状態からさえも生ずる。何らかの歪みによって第一人者たち自身が道を踏み外したのである (sin audaces, fit illa factio, genus ipsorum tyrannorum, eademque oritur etiam ex illo saepe optimatum praeclaro statu, cum ipsos principes aliqua pravitas de via deflexit)。」もっとも、逆に「最も有害な状態 (perniciosissimus status)」という表現もある。2, 47「それじゃあ君たちは見ていないのかね、王が主人になった様を、一人の過ちによって国家の態様が善きものから最悪のものになってしまった様を。すなわち、これは国民の主人であって、ギリシア人たちが潜主と呼ぶ者である。彼らが王であってほしいと思うのは、親のように国民の面倒を見、上に立つものとして下の者たちをできるだけ最善の生活条件に保つ者なのだ。すでに私が述べたように、これはたしかに国家の善き態様ではあるが、しかし言ってしまうと最も有害な状態に容易に墮落してしまう傾向をもったものなのだ (Videtisne igitur, ut de rege dominus extiterit uniusque vitio genus rei publicae ex bono indeterrumum conversum sit? Hic est dominus populi, quem Graeci tyrannum vocant ; nam regem illum volunt esse, qui consulit ut parens populo conservatque eos, quibus est praepositus, quam optima in conditione vivendi, sane bonum, ut dixi, rei publicae genus, sed tamen inclinatam et quasi primum ad perniciosissimum statum)。とはいえ、ここから直ちに perniciosissimus status rei publicae

これに対して、評価を込めないで、さしあたりは記述的に「状態」あるいは「形態」と解しておいた方がよい場合もある。たとえば、いわゆる三政体と関連して *status* が用いられる場合である。「…いわばある種の種子であって、〔それが無ければ〕他のもろもろの徳の始まりも国家そのものの始まりも見出されないであろう。したがって、私が説明したこのことのために創始されたこれらの集団は、最初に住む家のために一定の場所に居住地を定めた。この居住地の周りに自然の起伏と労働によって堡壘をめぐらせたので、このような住居のまとまりを城市と、さらには神殿と公共の空間を備えた場合には都市〔中心都市〕と呼んだのであった。したがって、すべての国民は、すでに説明したような種類の多数の者の集合であり、すべての国家〔市民団〕は国民の組織であり、すべての国家〔公共体〕は国民の物であって、ある種の決定によって導かれなければ永続きすることはない。ところでこの決定は、最初は国家〔市民団〕を生み出した当の原因に由来するものである。次いでこの決定は一人の人に割り当てられ、または選ばれた人々もしくは大勢や全員に引き受けられねばならなかった。かくして、一人の手の内にすべての事柄の中で最も重要なものがあるとき、その一人をわれわれは王と呼び、その国家の状態〔あるいは形態〕を王国と呼ぶのである（…*quaedam quasi semina, neque reliquarum virtutum nec ipsius rei publicae reperiatur ulla institutio. Hi coetus igitur hac, de*

という言い方ができるのかどうかは、微妙ではある。間に、*genus*が入っているからである。ちなみに、「国家のより不格好な種〔あるいは姿〕(*deformior species civitatis*)」という言い方もある（1, 51）。なお、アウグストゥスの時代における *optimus status* については、ロナルド・サイム（逸身喜一郎他訳）『ローマ革命 下』（岩波書店・2013年）346頁参照（「最良の体制」と訳されている）。

- (23) 1, 39「国民とは、何らかの仕方では集まった人々の集団すべてではなく、法の合意と利益の共有によって結びついた多数者の集団である（*populus autem non omnis hominum coetus quoquo modo congregatus, sed coetus multitudinis iuris consensu et utilitatis communione sociatus*）。」

qua exposui, causa instituti sedem primum certo loco domiciliorum causa constituerunt ; quam cum locis manuque saepsissent, eius modi coniunctionem tectorum oppidum vel urbem appellaverunt delubris distinctam spatiisque communibus. omnis ergo populus, qui est talis coetus multitudinis, qualem exposui, omnis civitas, quae est constitutio populi, omnis res publica, quae, ut dixi, populi res est, consilio quodam regenda est, ut diuturna sit. id autem consilium primum semper ad eam causam referendum est, quae causa genuit civitatem. Deinde aut uni tribuendum est aut delectis quibusdam aut suscipiendum est multitudini atque omnibus. quare cum penes unum est omnium summa rerum, regem illum unum vocamus et regnum eius rei publicae statum⁽²⁴⁾。」国家の最高の意思決定が王にある「国家の状態」あるいは「形態」を王国と呼ぶというときには、「状態」は規範的なものではなく、記述的なものと解することができる。同じことは、「3つの内の2番目の状態〔形態〕(status de tribus secundarius)」についても言える⁽²⁵⁾。さらに、具体的な事件に関連して「この(国家の)状態において (in hoc statu)」という言い方においても「状態」は記述的な意味しかもたない⁽²⁶⁾。

(24) 1, 41 et s.

(25) 1, 65「潜主を最良の人びとが打倒したなら、そしてそれはよく起こることであるのだが、国家は3つの内の2番目の状態〔形態〕をとることになる (quem si optimates oppresserunt, quod ferme evenit, habet statum res publica de tribus secundarium)」。

(26) 2, 56「さてかの時代においては元老院が国家を以下の状態に保っていた、すなわち、国民は自由であるがわずかなことしか国民によって遂行されることはなく、たいていのことは元老院の権威によって確立された習いにしたがって遂行され、そして統領たちは期間は1年に限られていたが態様そのものから見ても権利から見ても王の権力をもっていた (Tenuit igitur hoc in statu senatus rem publicam temporibus illis, ut in populo libero pauca per populum, pleraque senatus auctoritate et insituto ac more gererentur, atque uti consules potestatem haberent tempore dumtaxat annuam, genere ipso ac iure regiam)。」

その他に、たしかに記述的な意味にしか解釈できないが、しかし「状態」とか「形態」とかとは訳しにくい status の次のような用例がある。「あたかもボールのように相互の間で国家の status を奪い合う、王から潜主が、潜主から第一人者たちや国民が、彼らからまた党派や潜主が奪い、国家の同じ在り方がもうそれ以上長く保たれることはない (tamquam pilam rapiunt inter se rei publicae statum tyranni ab regibus, ab iis autem principes aut populi, a quibus aut factiones aut tyranni, nec diutius umquam tenetur idem rei publicae modus)⁽²⁷⁾」国家の「統治」とか「統治権力」⁽²⁸⁾とか、さらには公職者の地位を中心

2, 60「国家のこの状態において〔2人の護民官の創設によって元老院の力は弱められたがその支配は依然として続いていた前485年ころ〕国民から最も高い人気を得ており、王位を得ようと陰謀を巡らしていたスプリウス・カッシウスを財務官〔査問官?〕が訴追し、君たちも聞いているように、彼がその罪に陥っていることを自分は確かに知っていると父が言ったので、国民も譲歩して彼を死刑に処した (Quo in statu rei publicae Sp. Cassius de occupando regno molientem, summa apud populum gratia florentem, quaestor accusavit, eumque, ut audistis, cum pater in ea culpa esse conperisse se dixisset, cedente populo morte mactavit)。」2, 62「〔法律作成のための〕十人委員会の3年目が来たが、彼らは十人官であって、他の者に交代することを欲しなかった。この国家の状態は、国家〔市民団〕のすべての階級に対して衡平ではなかったので、これをすでにしばしば長続きはできないと私はすでにしばしば述べたが、この状態においては第一人者たちの手の中に全国家はあり、この上なく高貴な十人官たちが上に立ち、護民官からの異議申し立てはなく、他の政務官が加わることもなく、処罰されていない〔彼らが行った〕殺人やむち打ちに対する国民〔民会〕への訴えもなかった (Tertius est annus decemviris consecutus, cum iidem essent nec alios subrogare voluissent. in hoc statu rei publicae, quem dixi iam saepe non posse esse diuturnum, quod non esset in omnes ordines civitatis aequabilis, erat penes principes tota res publica praepositis decemviris nobilissimis, non oppositis tribunis plebis, nullis aliis adiunctis magistratibus, non provocatione ad populum contra necem et verbera relicta.)。」

(27) 1, 68.

(28) Loeb Classical Library の訳 (Clinton Walker Keyes) は ruling power of the State である。

とする「統治機構」と訳したくなるころではあるが、それではあまりに近代的であろう。潜主が支配する「状態」を覆して貴族や国民が支配する「状態」ということを、比喩的に「状態を奪う」という言い方にしたのか。いずれにせよ、この箇所だけからでは何も言えないのであって、より網羅的な調査が必要であろう。いずれにせよこの箇所の status が規範的意味をもたないことは明らかである。

これに対して、status が規範的意味をもつのではないかと解されるのは、次のような用例である。

「さてここで私は以上の国家の3つの態様について話すが、それは混乱させられたり混ぜ合わされたりしていない、その status を保っている態様のものである (Atque hoc loquor de tribus his generibus rerum publicarum non turbatis atque permixtis, sed suum statum tenentibus)⁽²⁹⁾。」²⁹

「しかし、国家のこの形態〔王政〕は最も変化しやすいものであり、その理由は一人の過ちによって破滅し、きわめて容易に最も危険な方向に向かってしまうからである。なぜなら、王政の国家はそれ自体としては非難できないものであるだけでなく、おそらくは他の単純な〔混乱も混合もない〕国家の態様よりもはるかに勝るものとされなければならないのだから。それは、どれか一つの国家の単純な態様を考察する、したがってその status を維持している限りの国家の態様を考察する場合のことであるが^g (ea autem forma civitatis mutabilis maxime est hanc ob causam, quod unius vitio praecipitata in perniciosissimam partem facillime decedit. Nam ipsum regale genus civitatis non modo non est reprehendendum, sed haud scio an reliquis simplicibus longe anteponendum, si ullam probarem simplex rei publicae genus, sed ita,

(29) 1, 44.

quoad statum suum retinet⁽³⁰⁾。』

ここで status は、王政を例にとれば、墮落して潜主政になっておらず、また他の貴族政や民主政とも混合していない純粋な (simplex) 状態あるいは形態である。あるいは、潜主政に墮落していない一定程度の水準を保った王政であり、その意味で規範的の意味をもっている。こういう規範的な意味は、次のような status civitatis にもあると解される。

「しかし、国民が自己の権利を保持するときには、いかなる国家の態様もより上位にあり、より自由であり、より幸福であることを否定する、彼らによれば、なにしろ国民こそが法律、裁判、戦争、平和、同盟、各人の命、金銭の主人であるのだから。これこそ唯一本当に国家〔公共体〕、すなわち国民の物と呼ばれるのだと考えるのである。したがって、彼らによれば、王や父たち〔元老院〕の支配から国民の物が自由のために取り戻されるのが通常であり、自由な国民からは王や最良の人びとの権力や資力が求められることはないと考えるのである。さらに、国民に無節操だという瑕疵があったとしても自由な国民のもつこの国家の態様全体が拒否するには及ばない。すべての事柄を自己の安全と自由に照らして見る一致した国民よりもより不変で堅固なものはない。この国家においては同じ一つのことがすべての人々にとって有益であるのだから、容易に一致が得られる。利益が様々に異なり、人によって役立つものが異なることから、不一致が生ずるのである。したがって、父たちが物事を支配していたときには、国家の status は存在しなかった。王政においてはましていわんやである… (si vero ius suum populi teneant, negant quicquam esse praestantius, liberius, beatius, quippe qui domini

(30) 2, 43.

sint legum, iudiciorum, belli, pacis, foederum, capitis unius cuiusque, pecuniae. Hanc unam rite rem publicam, id est rem populi, appellari putant. Itaque et a regum et a partum dominatione solere in libertatem rem populi vindicari, non ex liberis populis reges requiri aut potestatem atque opes optimatum. et vero negant oportere indomiti populi vitio genus hoc totum liberi populi repudari, concordi populo et omnia referente ad incolumitatem et ad libertatem suam nihil esse inmutabilis, nihil firmitus; facillimam autem in ea re publica esse concordiam, in qua idem conducat omnibus; ex utilitatis varietatibus, cum aliis aliud expediat, nasci discordias; itaque, cum patres rerum potirentur, numquam constitisse civitatis statum; multo iam id in regnis minus, ...⁽³¹⁾。』

これは、もちろん民主政を擁護する者たちの主張である。しかし、末尾の主張、貴族が支配していたときには、国家〔市民団〕の status は存在しなかった、まして王政においてはもっと存在しなかったという主張には、status の規範的意味は明瞭である。civitas といえるのは民主的政体をもつ国家だけである、res publica といえるのは、文字通りそれが「国民の持ち物 (res populi)」であるとき、国事（立法、裁判、戦争、平和、刑事裁判、財務）の主人が国民であるときである。そこにのみ status civitatis がある。したがって、ここでの status civitatis は「国家ということができる状態」あるいは「国家のあるべき状態」と解することができる。

以上キケロの『国家論』における status あるいは status civitatis の用法を見てきた。結論としていえることは、もちろん status は記述的に「状態」や「形

(31) 1, 48 et s.

態」を意味することがあることは確かである。しかし、*optimus status* や最後に見た用法からは、*status* には規範的な意味もあったと解されるのである。少なくとも、もっぱら記述的に用いられていると解される *genus rei publicae* や *modus rei publicae*—どちらも本稿では「態様」と訳した—とは違って、*status civitatis* や *status rei publicae* には規範の意味が込められることがあるということの確認しておいてよいであろう。

最後にローマ法源に言及すると、有名なのは3世紀の法律家ウルピアヌスの公法の定義である。「公法は、ローマ国家の *status* に関わるものであり、私法は個人の利益に関わるものである。なぜなら、物事には公共にとって有用なものもあり、私人にとって有用なものもあるからである。公法の内容は神事、祭司、政務官である (*publicum ius est quod ad statum rei romanae spectat, privatum quod ad singulorum utilitatem: sunt enim quaedam publice utilia, quaedam privatim. publicum ius in sacris, in sacerdotibus, in magistratibus constitit*)⁽³²⁾」ここで、*rei romanae* は *rei publicae romanae* であろう。ここでの *status* は、ローマ国家の状態あるいは形態の記述的な意味でとても十分に理解できる。他方で、*utilis* や *utilitas* と一緒に用いられていることから、規範的な意味で「よき状態」と理解することも可能であろう。近代的な意味で「ローマ国家 (Roman State)」と訳すことは論外としても、*utilitas* と同義と捉えて「ローマ国家の利益」、そこからさらにローマ法源でもしばしば現れる「公共の利益 (*utilitas publica*)」に進んで、公法とは公共の福祉に関する法の領域だというのも、やはり早計であろう。のちの時代の人びとにそのような解釈のきっかけを与えたとしても⁽³³⁾。

(32) D. 1, 1, 1, 2 (Ulp. 1 inst.).

(33) ポウストは「公共の福祉」の意味で理解している (Post, op. cit. (n. 1), 225)。これに対してコンガーは、慎重に中世の解釈者にきっかけを与えたという叙述に留めている (Congar, op. cit. (n.10), 4)。

4. 『グラチアヌス教令集』 前の status ecclesiae⁽³⁴⁾

858年9月東フランク王ルートヴィヒ（Ludwig der Deutsche：在位843年－876年）は西フランク王国に侵攻しトロワにまで至って、11月にアティニ（Attigny）の宮殿に退き返し、そこから西フランク王国の司教に対してランスに集合するように呼びかけ、これに参加しなかったランスおよびルアン大司教区の司教たちがランス大司教ヒンクマル（Hincmar de Reims：806年－882年）の主導の下キイジ（Quierzy）に公会議をもちヒンクマル起草の決議⁽³⁵⁾をルートヴィヒに送った。ルートヴィヒの司教招集の目的は、「聖なる教会の復興とキリスト教徒たる民のよき状態と救済について（de restauration sanctae ecclesiae et de statu ac salute populi christiani）」西フランクの司教たちと協議するためであった。⁽³⁶⁾これについて公会議は、次のように述べている。

「陛下のわれらに書かれたところでは、キリスト教徒たる民のよき状態と救済についてお尋ねになられたいとのことですが、まずは他の人びとを正す義務を負っていらっしゃる陛下御自身から始めるべきです。「医者よ、自分自身を治せ」と書かれているように〔『ルカ福音書』4, 23〕、そして他人の汚れを拭おうとする手は汚れていてはなりません。そして、陛下が他の人びとにあったら正さなければならないことを陛下について正しく非難できる人

(34) 以下は、Congar, op. cit. (n. 10), 7 et s. に依拠した。

(35) Epistola synodi Carisiacensis ad Hludowicum regem Germaniae directa, in: MGH, Capitularia regum Francorum II, 427 et s. ランスのヒンクマルについて簡単には、ファルク・ルミナーティ・シュメーケル編（小川他監訳）『ヨーロッパ史における裁判事例』（ミネルヴァ書房・2014年）140頁以下参照。

(36) MGH Capitularia II, 428, 14.

はいません。すなわち、陛下は王国の頂点にあるのですから、その配下の人びとの道徳のために役立たねばならず、家の中の燭台の上の明かりのように善の模範を示さなければなりません、すべての人々の目は陛下に向いていない⁽³⁷⁾なければならないのですから。』

ここで用いられている「キリスト教徒たる民のよき状態と救済 (status et salus populi christiani)」は、元来はルートヴィヒの用語であり、それを司教たちも用いて論じている。したがって、共通に理解しあえる用語であったと思われる。status と salus—キリスト教普及以前のラテン語なら通常は「幸福」、「福祉」—が並んで使われていることからすれば、両語は同義少なくとも類似の意味もつと考えられる。ルートヴィヒは「教会の復興とキリスト教徒たる民のよき状態と救済」を課題としたが、それは自らの侵攻の正当化のための議論であっただろう。しかし、司教たちは「教会の復興」には言及せず、「キリスト教徒たる民のよき状態と救済」とだけ言っている。教会 (ecclesia) が会衆を意味すると解すれば、populus christianus とは同義となる。実際以下で見るように、ここでは平信徒だけでなく教会指導者たる聖職者の諸特権や利益も論ぜられている。

「キリスト教徒たる民のよき状態と救済」のために王がまずなすべきことは、上に立つ者として自分を律し、支配下の人びとに模範を示すことである。

(37) Op. cit., 435, 5–11 : Et quia de statu et salute populi christiani, sicut nobis scripsistis, vultis quaerere, primo a vobis ipsis incipite, qui alios debetis corrigere, sicut scriptum est : “Medice cura teipsum”, et munda debet manus a sordibus esse, quae alienas sordes curat detergere. Et quae in aliis debetis corrigere, nemo in vobis iuste valeat reprehendere. Super quantos enim estis in regnis culmine, tantorum moribus debetis servire et sicut lucerna super candelabrum in domo posita bonitatis exempla monstrare, quia omnium oculi in vos debent intendere.

そのためには、王あるいは主人（君主）という名前を負っている方（王の中の王、主人の中の主人）＝キリストを常に不安な心をもって見上げ、彼に倣うのでなければならない。自己の欲望を抑え、利他的にふるまうといった道徳的な要請がなされる。しかし、それにとどまらず、教会の保護者、民の配慮者としての王に対する要求も述べられる。

「それゆえに主が誘惑者に唆された権力の下におかれた人々に『皇帝のものは皇帝に、神のものは神に』返せと教えられたように、神の下に人々の上におわします陛下も、神のものは神に、そして衡平な皇帝と同様に臣民のものは臣民にお返しく下さい。神には純粹で汚れなき信仰と誠実真摯なる崇敬を神にお返しく下さい、祭司たちについて、教会の特権について、聖所について、教会や修道の男女について、教会とキリスト教の擁護について、すべての困った人々の助勢や平安や慰めについて、先に予告しておきましたように。神に日々の日課を日々の祈祷によって、正しい絶え間ない施しによってお返しく下さい。…臣民に対して裁判を慈悲とともに、正義を衡平とともにお返しく下さい。謙遜する者たち、神を畏れる人たちを奮い立たせ、おごり高ぶる人を打ち負かし、賤しむようにしてください。…宮廷の従者を任命

(38) Op. cit., 435, 13-18 「そのためには、王であり主人と呼ばれる陛下は、王や主人という名前をいただいた方、すなわち王の中の王、主人の中の主人である方を常に不安な心をもってみあげなければなりません。そして、神が「世界を衡平に支配される」ように、そしてこのために、『知恵の書』で言われているように、「人を作られて」、人が同じように衡平に支配するようにされた〔9, 2, 3〕 のですから、この陛下がこのお方とともに支配されたいのなら、このお方に倣うのです（Propterea oportet, ut, qui rex estis et dominus appellamini, in illum semper suspenso corde suspiciatis, a quo, videlicet rege regum et domino dominorum, nomen regis et domini mutuastis ; et, sicut ille “disponit orbem terrae in aequitate” et ad hoc, sicut in libro Sapientiae dicitur, “constituit hominem”, ut ipse similiter faciat, imitamini illum, si vultis regnare cum illo）。」

するときは、神を知り、愛し畏れる人を、困って宮廷にやってくる人がどんな人であれ…父や慰め人として敬い喜び勇んで陛下に会いに来るように、…嘆き陰口をたたきながら逃げ帰ることのないように最大限の配慮をする人を任命してください。伯や国家の従者〔大臣〕を任命するときは、贈り物を好まず、貪欲を憎み、高慢を受け付けられない人を任命してください。さらに、農民を抑圧したり侮辱したりしない人、けっして農民たちの収穫物を強奪し、ブドウ畑や牧草地や森を荒らさない人、農民たちの家畜や幼い家畜あるいは彼らのものを何であれ強奪したり、暴力や策略で取り上げない人、彼らの司教の意見に従い、神に関わりキリスト教の教えに適合することを行う人、訴えを受け付けるのは利益を得るためではなく、神の家や寡婦や孤児そして民が正義〔裁き〕を得るためであり、紛争当事者を争わせて、そこから何らかの利益を得るよりも、正義を損なうことなく和解へと至らせようと努める人、…⁽³⁹⁾。』

(39) Op. cit., 436, 7 et s. : Quapropter, sicut Dominus sub potestate constitutos ex temptatorum occasione docuit reddere, “quae sunt Caesaris, Caesari et, quae sunt Dei, Deo”, ita et vos, qui sub Deo estis et super homines estis, reddite, quae sunt Dei, Deo, et sicut Caesar aequus, quae subditorum sunt, subditis reddite. Reddite Deo puram et immaculatam fidem et sincerissimum cultum in sacerdotibus, in ecclesiarum privilegiis, in sacris locis, in ecclesiasticis et religiosiis viris et feminis, in defensione ecclesiae et christianitatis, in aequitate et iustitia populi christiani, in sublevatione et tranquillitate et consolatione omnium indigentium, sicut praemisimus. Reddite illi quotidianum pensum in quotidiana oratione, in iustis et assiduus elemosinis. Reddite subditis iudicium cum mesericordia, iustitiam cum aequitate. Studete exaltare humiles et Deum timentes et debellare atque humiliare superbos. Constitute ministros palatii, qui Deum cognoscant, ament et metuant ; qui maximam curam gerant, quatenus, quicumque necestuosi palatium audierint patrem et consolatorem mirantes gaudentes vos videre accurrant, non gemendo et maledicendo refugiant. Constituite comites et ministros rei publicae, qui non diligent munera, qui odiant avartiam, qui de-

「キリスト教徒たる民のよき状態と救済」のために王に求められていることは具体的な徳目であって、別稿に見る「教会全体のよき状態」によって議論されることとは、大きく異なっている。会衆としての教会の幸福、安寧といったことからすぐに浮かんでくるのは、ここで描かれたような内容であろう。

「教会のよき状態 (status ecclesiae)」に関連して道徳的な事柄が論ぜられるというのは、たとえば10世紀のクリュニ修道院第2代院長オド (Odo: 878年頃－948年) の場合についても言えるであろう。ボム (Baume) 修道院長ベルヌスはオドの資質を認めて彼の意向を聞くことなく司祭に叙階することを決めた。しかし、オドは司祭になることに対して不安をもっていたので、ベルヌスは叙階を執り行うリモジュ司教テウルピオの下にオドを送り、司教は司祭の職務の要諦について話し、そこから2人の間で「教会のよき状態 (status ecclesiae)」についての話し合いが行われた。そこでオドが話した内容は、司教の勧めによって小冊子にまとめられた。⁽⁴⁰⁾それが *Collationes* である。ここでも、教会のよき状態を実現する、あるいは、維持するための具体的な徳目が議論された。こうした具体的な徳目と結びついた status ecclesiae の概念は、1140年ころに修道士グラチアヌスが編纂した『矛盾教会法令の一致 (*Concordia dis-*

testentur superbiam ; qui non opprimant neque dehoneſtent paganses ; qui messes et vineas et prata ac silvas eorum nequaquam devastent ; qui illorum pecora et friskingas vel quaeque illorum sunt non praedentur neque diripant et per violentiam ac mala ingenia, quae illorum sunt, nullomodo auferant ; qui episcoporum suorum consilio, quae Dei sunt et christianitati convenient, faciant ; qui placita non pro acquisitione lucri teneant, sed ut casae Dei et viduae ac pupilli et populus iustitiam habeant, et plus litigantes ad concordiam salva iustitia revocare studeant, quam committere, et ipsi inde aliquod lucrum possint habere...

(40) このエピソードは、オドの弟子修道士ヨハネスによって書かれた *Vita sancti Odonis* I, 37: PL 133, 60 にある。*Collationes* については、松尾佳代子「クリュニー修道院長オドと『正当な暴力』」西洋史学204号 (2001年) 28、31－33頁、かなり詳しく紹介している。

concordantium canonum)』、いわゆる『グラチアヌス教令集』においても基本的には変わっていない。

5. 『グラチアヌス教令集』の *status ecclesiae generalis*

『グラチアヌス教令集』第2部の第25事案 (Causa 25) は次のようなものである。

「聖ローマ教会がある洗礼教会を特権によって保護し、その小教区における十分の一税をすべて徴収できる権利を付与した。次いである修道院を同様に固有の特権で保護し、自らの土地からはいかなる十分の一税も支払う必要がないと定めた。そこで先に保護された洗礼教会の小教区内で前記の修道院が売買および贈与によって土地を取得するという事態が生じた。その結果、修道士と聖職者の間で十分の一税をめぐる⁽⁴¹⁾争論が生ずる。」

最初の問題 (quaestio prima) は、「洗礼教会の聖職者は特権の権威によってその小教区の十分の一税をすべて自己のものと主張できるか (an clerici baptismalis ecclesiae auctoritate priuilegii decimas suae diocesis ex integro sibi ualeant uendicare)」である。まず否定論が唱えられる。

「かの特権の権威によっては聖職者が十分の一税をすべて自分のものと主

(41) Dictum a. C. 25 q. 1 c. 1 : Sancta Romana ecclesia quandam baptismalem ecclesiam suis muniuit priuilegiis, decimationes suae diocesis ex integro sibi attribuens. Item quoddam monasterium similiter muniuit priuilegiis propriis, decernens, ut ex propriis prediis nulli decimas persolueret. Accidit itaque, ut intra diocesim premunitae baptismalis ecclesiae prefatum monasterium alia emptione, alia donatione predia sibi inueniret. Oritur itaque contentio inter monachos et clericos de decimis.

張できないことは、次のことから証明される。すなわち、十分の一税は聖なる教父たちの定めによって4等分され、1/4は司教に、次の1/4は聖職者に、3番目は建物の修復のために、4番目は貧者のために割り当てられている。聖なる公会議決議によって定められたことは使徒の定めにも劣らず守らなければならない。⁽⁴²⁾」

十分の一税の配分は教父たちによって決定されており、ローマ教会が十分の一税をすべて洗礼教会（小教区教会）が自分のものとしてよいという特権を付与することは、この決定に反する行為である。したがって問題は一般化されて、教皇は教父たちの決定あるいは公会議決議に反して特権を付与することができるかということになる。グラチアヌスは、まずはこれを否定して、その根拠となる教会法令を引く。たとえば、教皇グラシウスの書簡が最初に引かれる（c. 1）。

「われらが確信するところでは、キリスト教徒で誠実であればいかなる公会議の決定であれ、教会全体の承認によって確証したのであれば、知らないということはなく、とりわけ司教座は首位の司教座と同様にこの決定を実行しなければならない。首位の司教座はといえば、いかなる公会議であれその権威をもって確かなものとし、調整を引き続き行うことによってそれを大切に保っているのである。⁽⁴³⁾」

(42) Dict. a. C. 25 q. 1 c. 1 Pars I: Quod uero auctoritate illius priuilegii decimas sibi ex integro clerici uendicare non ualeant, hinc probatur, quia decimae iuxta decreta sanctorum Patrum quadripartito diuiduntur, quarum una pars episcopis, secunda clericis, tertia fabricis restaurandis, quarta uero pauperibus est assignata. Decreta uero sanctorum canonum neminem magis quam Apostolicum seruare oportet.

(43) C. 25 q. 1 c. 1: Confidimus, quod nullus iam ueraciter Christianus ignoret, uniuscuiusque sinodi constitutum, quod uniuersalis ecclesiae probauit assensus, nullam magis

ローマ教会が教会全体で承認した公会議の決定を尊重することが、ここで述べられている。もっとも、最後に述べているように、ローマ教会は公会議決議を文字通り墨守しているわけではなく、「引き続き行う調整 (continuata moderatio)」によって大切に保つということは、後に見る「解釈」の可能性につながるものを含んでいる。もっとストレートに教父たちの公会議決議と教皇の決定とを問題にするのは教皇ウルバヌス⁽⁴⁴⁾ (c. 6) の書簡である。

「ローマ司教には新しい定めを作ることが常に許されてきたと主張する人たちがいる。このことをわれらも否定しないだけでなく、強く断言する。しかし、この上なく努力して知らなければならないことは、われらが新しい定めを作ることができるのは、福音布教者たちがなにも述べていなかったところだということである。これに対して、主あるいは、その使徒たち、さらには彼らの後を継いだ聖なる教父たちが何かを決定して確定したところにおいては、新しい定めを作ってはならず、むしろその定められたことを血肉となるまでにその魂の中に打ち固めなければならないのである。すなわち、使徒たちや預言者たちが教えたことを破ろうとする（これはあってはならないことだが）ときには、かれは決定を与えているのではなく、むしろ誤っていることを確証されるのである。しかしこれは、狼たちの悪だくみに抗して主の教会を最善の状態で常に保ってきた者たちにはおよそ縁のないことである。⁽⁴⁵⁾」

exequi sedem pre ceteris oportere, quam primam, que et unamquamque sinodum sua auctoritate confirmavit et continuata moderatione custodit.

(44) 現在一般的に用いられている『グラチアヌス教令集』の刊本の編者であるフリートベルクは、ウルバヌス1世および2世の書簡集にはこの法文にあたる文章は見当たらないという。

ここでは、「法律に反して (contra legem)」と「法律の外で (praeter legem) [法律の規定のないところで]」が区別され、前者の場合にはローマ教会は新しい立法ができないが、後者の場合にはできると説いている。この法律解釈論の道具がどういう経路でここに入ってきたのかは、この法文の由来が判らない以上は、明らかにすることはできない。しかし、ローマ教会を立法者だとするとこの立論は異様であり、後に見るように、グラチアヌスの付言は解釈論の枠組みに戻している。最後の「主の教会を常に最善の状態で保ってきた (ecclesiam Domini semper optime custodire)」は、客観的事実 (完了形) として言われているが、将来の教皇がどうなるかという問題はここでは立てられていない。

この C. 25 q. 1 において「教会のよき状態」に言及があるのは、またもや教皇レオ 1 世の年の書簡 (c. 2) である。

「神の命令と使徒たちの警告に励まされて、諸教会すべてのよき状態のためにわれらは集中を絶やすことなく警戒し、そして何か非難に値することが見いだされるときは、無知未経験や不遜な企てから呼び戻すことにしている。すなわち、神の声の命ずる警告によって、至福の使徒は〔イエスを知ら

(45) C. 25 q. 1 c. 6 : Sunt quidam dicentes, Romano Pontifici semper licuisse nouas condere leges. Quod et nos non solum non negamus, sed etiam ualde affirmamus. Sciendum uero summopere est, quia inde nouas leges condere potest, unde Euangelistae aliquid nequaquam dixerunt. Ubi uero aperte Dominus, uel eius Apostoli, et eos sequentes sancti Patres sententialiter aliquid diffinierunt, ibi non nouam legem Romanus Pontifex dare, sed potius quod predicatum est usque ad animam et sanguinem confirmare debet. Si enim quod docuerunt Apostoli et Prophetiae destruere (quod absit) niteretur, non sententiam dare, sed magis errare conuinceretur. Sed hoc procul sit ab eis, qui semper Domini ecclesiam contra luporum insidias optime custodierunt.

ないと〕3度繰り返した結果神秘の戒めに浸され〔ルカ福音書22, 34以下〕、キリストを愛する者はキリストの羊を牧養せよとの命令を受け、神のあふれんばかりの恵みによってわれらがその座にある使徒座に対する畏敬の念に励まされて、われらは怠惰という危険をできる限り押さえつけ、第一の使徒の告白—それは主を愛する人であることを証している—がわれらにおいて見出されないことがないようにしている。なぜなら、任された主の羊の群れの牧養をそんなにしばしば怠る者は、最高の司牧を愛していないと確証されているからである。⁽⁴⁶⁾」

この法文が本問の中で引かれているのは、ローマ教会あるいは教皇が神の命令、使徒の訓令を遵守することの教えとして引かれている。教皇が神にゆだねられた信徒たちを守るために司牧者として絶えず警戒を怠らないことが、「教会のよき状態」のために必要なことである。したがって、ここでも「教会のよき状態」は教皇の遵守すべき徳目との関連で引き合いに出されている。

以上は、主として教皇も教父たちが定めたことに反することはできないことの根拠となる権威であるが、これに対して「矛盾する教会法令」が明示的に提示しているわけではない。しかし、次の9世紀北フランスで偽造された教皇令集に由来する教皇ダマスの書簡(c. 12)は、教皇の権威を主張するものとし

(46) C. 25 q. 1 c. 2: Diuinis preceptis et apostolicis monitis incitatur ut pro omnium ecclesiarum statu impigro uigilemus affectu, ac, si quid umquam reprehensioni inuenitur obnoxium, aut ab ignorantiae inpericia, aut a presumptionis usurpatione reuocemus. Ammonente enim diuinae uocis inperio, quo beatissimus apostolus trina repetitione mysticis sanctionibus inuitur, ut Christi oues qui Christum diligit pascant, ipsius sedis, cui per habundantiam diuinae gratiae presumus, reuerentia cohortamur, ut periculum desidiae, quantum possumus, declinemus, ne professio summi Apostoli, qua se amatorem Domini testatus est, non inueniatur in nobis, quia qui negligenter pascit tociens commendatum dominicum gregem conuincitur summum non amare pastorem.

で引かれていると解することができる。

「教会の身分および聖職者の紀律について公布された、われらの全前任者たちの決定すべてはすべての司教および司祭によって大切に守られなければならないことをわれらは命ずる。したがってこの点で何か違反をしたならば、爾後職務の許可を拒否されることを知ることになる。⁽⁴⁸⁾」

以上の教皇書簡の権威を踏まえて、グラチアヌスは C. 12 q. 1 の末尾の付言においてさしあたりは次のような結論を導き出す。

「したがって、首位座が公会議の定めを何よりも守らなければならないとすれば、すべての諸教会のよき状態のために首位座が集中を絶やすことなく警戒することが必要であるとすれば、ローマ司教によって決定されたことがすべての人によって守られることが適切であるとすれば、聖なる教会法令に従うことを知らない人々が祭壇に仕えてはならないとすれば、以下のことは明らかである。すなわち、聖なる教会法令〔公会議決議〕の定め に反して諸教会のよき状態を混乱させたり掻き乱したりするような特権は使徒によって許与されてはならない。⁽⁴⁹⁾」

(47) PL 130, 675.

(48) C. 25 q. 1 c. 12: Omnia decretalia cunctorum predecessorum nostrorum constituta, que de ecclesiasticis ordinibus et canonum promulgata sunt disciplinis, ita a omnibus episcopis, ac sacerdotibus generaliter custodiri debere mandamus, ut si quid in illa commiserint, ueniam sibi honoris deinceps nouerint denegari.

(49) Dictum post C. 25 q. 1 c. 16: Si ergo primam sedem statuta conciliorum pre omnibus seruare oportet, si pro statu omnium ecclesiarum necesse est illam in pigro uigilare affectu; si ea, que a Romanis Pontificibus decreta sunt, ab omnibus seruari conuenit; si illi, qui

教皇は教父たちの公会議の定めを遵守しなければならないということ、および、「諸教会のよき状態」のために教皇は警戒を怠ってはならないということから、「諸教会のよき状態」を混乱させるような特権を教会法令（公会議決議）に反して教皇は許与してはならないという結論を導き出す。これは、『教令集』の解釈学者たちによって非常に重要な意味をもち、大きく発展する議論のきっかけを与えるものである。しかし、グラチアヌスはこの権威から得られるさしあたりの結論にとどまっていない。このさしあたりの結論とある意味では反対の結論を導き出す。

「以上に対しては、以下のように答えられる。すなわち、神聖不可侵のローマ教会は聖なる教会法令〔公会議決議〕に法〔たる性質〕と権威を付与しているのであって、それによって拘束されているのではない。なぜなら、ローマ教会が教会法令〔公会議決議〕を創設する権利を有するのは、それがすべての諸教会の頭であり、つなぎの軸だからであって、その準則に違えることは何人にも許されないのである。したがって、ローマ教会が教会法令に権威を与えるその仕方は、自らがそれに服するというものではない。

ところで、キリストは律法を与えた方だが、その律法そのものを体によって履行した、すなわち、8日目に割礼を受け、40日目に神殿において犠牲とともに捧げられ〔ルカ福音書2, 21-39〕、これによってご自身において律法を神聖なものとされた。しかしその後、自らが律法の主人であるということを示すために律法の文言に反して皮膚病患者に触れて皮膚をきれいにし〔マタイ福音書8, 2-4〕、使徒たちが安息日の文言に反して麦畑を横切り、穂を刈り取りその升で擦ったのを、ダヴィデの称賛すべき割礼と寺院の

nesciunt sacris canonibus obedire, altaribus ministrare non debent : patet, quod contra statuta sanctorum canonum, quibus status ecclesiarum uel confundantur uel perturbantur, privilegia ab Apostolico concedi non debent.

例によって弁護して〔マタイ福音書12, 3〕、次のように述べた。「君たちは読んでいないのか、アビメレクのところにダヴィデがやってきて捧げものにしたパンを彼に与えたとき、彼がなにをやったのかを。このパンは祭司以外のものが食べることを許されていなかったのに、彼とその僕たちは一緒に食べたのである〔サムエル記上21, 3－6〕。…ここではさらに主について次のように言われている。「イエスは権力をもつものとして説いていた」〔マタイ7, 29〕。…同様に、首位座の司教たちは、自らあるいは自らの權威により別の者が作り出した教会法令に敬意を表するが、それは自らがへりくだって教会法令を大切に保持し、もってそれを守るべきことを他の者たちに示すためである。しかし時には、命令することにより、あるいは、確定することにより、あるいは決定することにより、あるいは別様に行為することによって、自らが教令の主人であり創設者であることを示す。…したがって、すでに述べたように、首位座が決定して命じたことを遵守すべきであるのは、遵守する必要〔義務〕があるからではなく、〔命令を〕授与する權威があるからである。それゆえ、使徒座には一般的決定に反して特殊な特権を認め、一般的決定によって禁ぜられたことを特殊的な恩恵によって容認することは許される。⁽⁵⁰⁾」

(50) Loc. cit. : *His ita respondetur : Sacrosancta Romana ecclesia ius et auctoritatem sacris canonibus inperit, sed non eis alligatur. Habet enim ius condendi canones, utpote que caput et cardo est omnium ecclesiarum, a cuius regula dissentire nemini licet. Ita ergo canonibus auctoritatem prestat, ut se ipsam non subiciat eis. Sed sicut Christus, qui legem dedit, ipsam legem carnaliter inpleuit, octaua die circumcisis, quadragesimo die cum hostiis in templo presentatus, ut in se ipso eam sanctificaret, postea uero, ut se dominum legis ostenderet, contra litteram legis leprosum tangendo mundauit, Apostolos quoque contra litteram sabbati per sata pretergredientes, spicas uellentes et confricantes minibus suis, probabili exemplo Dauid, circumcisionis, et templi excusauit, dicens : "Non legistis, quid fecerit Abimelech, quando uenit ad eum Dauid, et dedit ei panes propicionis, de quibus non lice-*

キリストは自ら律法に従って秘蹟を受けることによって秘蹟を聖なるものとした。しかし、キリストは律法の主人であって、律法に反する行いを自ら行い、あるいは、律法に反する行いをした使徒たちを弁護した。同様に、公会議決議に法としての権威を与えるのは教皇自身であり、教皇が公会議決議を遵守するのは、他の者たちがそれを遵守するように見本を示しているからである。公会議決議を遵守する義務はないのであって、したがって必要な場合には公会議決議に反する特権を付与することができる。これは、一般的な結論である。具体的な場合については、なお若干の留保がなされている。

「したがって、以上のことからまとめれば、聖ローマ教会は任意の者をその特権によって保護することができるのであり、また一般的な決定の外で何かを特別の恩恵によって許容することができる。ただし、衡平な割合を考慮して、したがって正義の母であるローマ教会がいかなる点においても正義を違えていると見いだされることがないように、すなわち信仰や必要や示された恭順のために許与される特権が誰かを高めて富裕にすることのないように、多くの人の損失を顧みなかったために貧困の悲惨へと貶められる人がないように、⁽⁵¹⁾しなければならぬ。」

bat edere, nisi solis sacerdotibus, et comedit ipse et pueri eius?"...Sic et summae sedis Pontifices canonibus a se siue ab aliis sua auctoritate conditis reuerentiam exhibent, et eis se humiliando ipsos custodiunt, ut aliis obseruandos exhibeant. Nonnumquam uero seu iubendo, seu diffiniendo, seu decernendo, seu aliter agendo, se decretorum dominos et conditores esse ostendunt....Oportet ergo primam sedem, ut diximus, obseruare ea, que mandauit decernendo, non necessitate obsequendi, sed auctoritate inperitiendi. Licet itaque sibi contra generalia decreta specialia priuilegia indulgere, et speciali beneficio concedere quod generali prohibetur decreto.

(51) Loc. cit., §. 4 : Valet ergo, ut ex premissis colligitur, sancta Romana ecclesia quoslibet

一部の者に特権を付与することによって不平等が生み出される可能性がある。その結果ローマ教会が正義に反していると見られる可能性がある。それを避けるためには衡平を考慮しなければならないが、そのことと教皇が特権を付与することができるということとをどのように調整するのかという問題はここでは提示されていない。こういう不平等が「教会のよき状態」といかに関わるのか、それは次の時代の課題となる。

6. 結びにかえて

以上見てきたように、status ecclesiae「教会のよき状態」は、『グラチアヌス教令集』に至るまでの時代についていえば、信徒たち全体のよき状態、救済を意味した。そのために教皇あるいは司教や司祭あるいは国王に対して様々な徳目が要求された。最後のグラチアヌスに至って、それは教皇の立法権との関連で引き合いに出されるに至った。ローマ法のもう一段の影響の中でどのように展開してゆくのか、それは続く別稿の課題である。

suis priuilegijs munire, et extra generalia decreta quedam speciali beneficio indulgere, considerata tamen rationis equitate, ut que mater iusticiae est in nullo ab ea dissentire inueniatur, ut priuilegia uidelicet, que ob religionis, uel necessitatis, uel exhibiti obsequii gratiam conceduntur, neminem releuando ita diuitem faciant, ut, multorum detrimenta non circumspiciendo, in paupertatis miseriam nonnullos deiciant ;